



深作少年が見た焼け跡 上

ノンフィクション作家

三山 喬

焼け跡、闇市、進駐軍、教科書の墨塗り、買い出し列車、『リンゴの唄』のメロディー……。

昭和三十六年（一九六一）に生まれ、ことし還暦の私が、『昭和二十年代（一九四五～五四）』という時代に思い描けるのは、敗戦後一～二年の風景、『焦土と化した日本』を象徴する断片的な事柄に集中する。十年単位に幅を広げ、『占領期』や『復興期』の全体像を問われると、イメージは途端に漠としてしまう。

もちろん東京裁判やサンフランシスコ講和条約など『年表上の出来事』の知識はある。しかし戦後史が前後関係のある『流れ』としてリアルに動き始めるのは、昭和三十年代以後、漫画・映画のヒット作『三丁目の夕日』で描かれた高度成長期になってからだ。

寄つたりの感覚なら、昭和二十年代についての『国民的記憶』はもう失われたも同然と言えるだろう。

本シリーズでこの時期にあえて光を当てるのは、平成の中ごろまで存在したこの『国民的記憶』にこそ、戦後体制を支えた『民意』の出発点があると思うからだ。戦中派が目に見えて減少したこの十年ほど、その了解は急速に失われた。国民世論の『対立と分断』はいまや世界的潮流だが、日本の場合、分裂の背景に世代交代の影響が色濃く感じられるのだ。

『戦中派の価値観』は必ずしも、確固たる共通理念としてあったわけではない。それでも高度成長期を代表する庶民派の宰相・田中角栄は「戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが戦争を知らない世代が政治の中枢になった時はとても危ない」という言い方をした。田中が活躍した時代にも、保革の対立や九条をめぐる改憲論争は存在した。それでも彼は、その違いを超越した平和国家への『国民的合意』が確かにあると強調したのである。

現在はどうだろう。冷戦が終結してすでに約三十年。共産主義をめぐるイデオロギー対立は事実上消滅して

同じ『出生前の時代』なら、むしろ戦時中や開戦前の時期のほうが、小説や映画、テレビドラマで刷り込まれた情景から、まだ雰囲気がかかる。エアポケットのようにすっぱりと抜け落ちてしまうのが、敗戦後の十年ほどなのだ。

失われた『国民的記憶』

親世代の『戦中派』なら、当然、感覚は違っていただろう。しかし、あの敗戦の日は七十六年前。当時十代だった子どもたちは八十年代後半から九十年代になり、成人だった人はほとんどが他界してしまった。私と同世代、あるいはそれ以下の人たちが、おおむね似たり久しいのに、『左右の分断』は当時にも増して深刻化した観がある。論点がかつての『資本主義対社会主義・共産主義』のテーマから、『戦後民主主義的な価値観そのもの』へと移行した。右派の人々は、自由や人權、民主主義といった戦後日本の中心的理念に『ささへ、』行き過ぎの見直し』を唱えるようになっていく。

その一方、たとえば中国の覇権を警戒し、G7や「クアッド」（日米豪印）の結束を訴える文脈では、日本の保守政治家も「価値観を共有する国々」と、わが国が民主主義勢力の一員であることを強調する。果たして私たちは本当に、欧米と同じ価値観を共有すると言えるのか。

G HQによる昭和二十年以後の民主化政策は、現実には東西冷戦による「逆コース」でわずか二～三年でブレーキがかかり、戦前からの政治勢力や社会システムとの妥協が図られるようになった。そのために、『新生日本』が、戦前の何を否定して、新たな理念をどう規定するか、歯切れの悪い変革になったのだが、戦争で塗炭の苦しみを味わった国民は、それでも総体として民主化の流れを歓迎した。

ただ、さまざまな矛盾を内包し、理念の明確性を欠